

子どもの集団構成におよぼす玩具の役割

研究第8部 星 美 智 子
湯 川 礼 子

I 目 的

本研究は、保育技術に関する研究の一環としておこなわれた。玩具の特性が、子どものグループ構成——集団のまとまり、メンバーの人間関係——にどのような影響を与えていくかを、実験的条件のなかで徹視的に観察す

る。その結果から、保育のなかで子どもの集団関係を発展させるために、玩具を積極的に活用する基礎資料をうることを目的としている。

II 方 法

(1) 手続き

1) 無差別に年長児5名づつを10組編成する。
2) 各編成組ごとに《ボール》《綱》《床上積木》《玩具なし》と玩具を変えて4回の実験をおこなう。集団の慣れを避けるために、継続して施行することは避ける。

3) 5名の被験児を保育室に入室させ、各人に①～⑥の番号札を肩につける。これは記録上の必要からの番号であり、たとえば No.1 の組①の子は、玩具を変えた4回を通して①とする。

4) 子どもたちが番号札を気にしている時間(初回5分、2回目から3分)を待ち、玩具を出して、「さあ、みんなで好きなように遊びましょう」と教示する。10分間あそばせる。10分経過のあと「今日はこれでおしまいです。また、あとで遊びましょう」と打切る。

(2) 実験材料とその選択

《ボール》 子ども用サッカーボール3個。

集団構成に流動的の刺激を与えるものとしてボールをとりあげる。5名に3個としたのは、流動的効果を考慮したものである。

《綱》 ビニール掩いの洗濯紐を5mに切ったもの一本。

集団構成に連鎖的の刺激を与えるものとして選択した。

《床上積木》 フレーベル床上積木一箱。

集団構成に結合的の刺激を与えるものとしてこれを選ぶ。

《玩具なし》 対照条件として、また、集団構成を分散させやすいものとして、何も玩具を与えないで遊ばせる場面をつくった。

(3) 観察記録

観察者は2名で、観察者aは①の子の行動を追って観察記録する。ひとりの子を通して、課題のことなる4場面での集団との関係の変化をみ、それぞれの課題の特殊性をみようとするものである。

観察者bは、集団構成の変化を主眼として全体の状況を観察する。実験開始時より60秒経過ごとに、1分、2分……10分まで、その時点における各メンバー①～⑥の位置と玩具の関係を図示していく。

(4) 被験児

第1表 被 験 児 大文字—男 小文字—女
・印個人観察

メンバー グループ	①	②	③	④	⑤
No.1	・K.H.	K.M.	M.M.	y.h.	y.u.
No.2	・K.I.	T.K.	K.M.	t.k.	y.y.
No.3	・H.O.	Y.I.	K.K.	h.a.	k.a.
No.4	・T.N.	N.T.	I.S.	y.u.	k.i.
No.5	K.H.	K.I.	t.k.	・y.h.	h.a.
No.6	H.O.	T.N.	y.y.	・k.i.	k.a.
No.7	・K.M.	T.K.	K.I.	M.M.	K.M.
No.8	・H.O.	K.K.	K.H.	Y.I.	N.T.
No.9	・M.M.	T.N.	K.I.	K.M.	K.M.
No.10	・k.i.	y.u.	t.k.	y.h.	t.s.

都内T保育所年長組25名。延人員50名。なお、予備実験としては年少組を対象とした。第1表は、各グループの編成メンバーである。

(6) 実験場所、日時

T保育所の保育室(9坪)を用い、机、椅子その他遊具類を一切、他室へ移動して実験条件をととのえた。

実験の日は、1968年4月～9月である。

III 結 果

1. グループの形態

1) あそびの形態からの考察

まず、各メンバーの60秒ごとの記録から、ひとりひとりの子について、「傍観している」「ひとりあそび」「ふざけ他」(ふざける、おしゃべり、けんが、手をつないであるく、かけまわるなど)互いの交流はあるが積極的な遊びといえないもの、そして「平行あそび」「協同あそび」の五つの形態に分類してみた。ひとりの子について、一つの実験場面で、10回の行動がチェックされることになる。さらに、これを四つの課題別(玩具別)に、全グループ10組を集計する。その結果は第2表、第1図のようになる。なお、《ボール》の実数が400なのは、実験当日欠席の子があり実験不能のグループ2組ができたためである。《綱》は、実験途中で怪我をして6分間退室した子があり、総計494となっている。

ここで明らかなのは、まず、ほんやり他の子のあそびを眺めている「傍観」の割合は、《積木》がもっとも少

なく(3%)、つぎに《玩具なし》(6%)、《綱》(8%)、《ボール》(12%)の順になっている。また、ひとりで遊んでいる「孤立」は、《積木》が18%、《ボール》が12%で、《玩具なし》は4%と少なくなり、《綱》のばあいにはさらに少なく2%である。つぎに「ふざけ他」についてみると、《玩具なし》がとくに多く35%、《ボール》23%、《綱》22%であり、《積木》は、それらの半分以下の10%である。「平行あそび」についてみると、《ボール》の33%が目立っており、他は似た傾向で、《積木》16%、《玩具なし》14%、《綱》13%になっている。互いに協力してあそぶあそび「協同あそび」は、《綱》55%、《積木》53%とそれぞれ半ば以上を占めているのに対し、《玩具なし》41%、《ボール》21%となっている。

こうしてみると、遊びがもっとも望ましい形に発展しているのが《積木》であり、「傍観」や「ふざけっこ」など遊んでいないものをみると13%にすぎない。この「傍観」と「ふざけっこ」を合わせたものをみると、他の玩具は、《積木》の2倍以上で、《綱》30%、《ボール》35%、《玩具なし》41%となっている。やはり《玩具なし》が遊びのまとまりが一番悪くなっている。

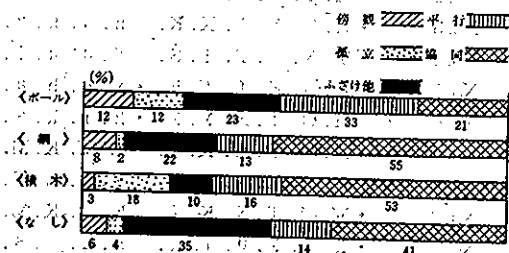
2) グループ構成人数

「協同あそび」だけをとりあげ、その構成人数をみると、第3表に示すようになる。グループの構成人数では、《ボール》が特徴的で2人のやりとりが圧倒的に多い。《綱》は4人グループ、5人グループが多く、連鎖的に子どもをつないでいく特性がでている。《積木》

第2表 あそびの形態 カッパ内%

	傍観	孤立	ふざけ他	平行	協同	計
ボール	48 (12)	47 (12)	89 (23)	133 (33)	83 (21)	400 (100)
綱	39 (8)	11 (2)	108 (22)	67 (13)	269 (55)	494 (100)
積木	14 (3)	92 (18)	49 (10)	80 (16)	265 (53)	500 (100)
なし	28 (6)	21 (4)	173 (35)	71 (14)	207 (41)	500 (100)

第1図



第3表 協同あそびの人数構成 (%)

	《ボール》	《綱》	《積木》	《なし》
2人	92.0	8.8	43.9	32.2
3人	0.0	19.1	35.2	25.8
4人	0.0	39.7	6.6	17.8
5人	8.0	32.4	14.3	24.2
	100.0	100.0	100.0	100.0

は、2人、3人のグループでの協同が多い。4人グループがとくに少ないが目立つ。つまり、2～3人グループに分かれるか、全員でまとまるかになり、ひとりだけ除けものにして協同あそびすることが少ないといえる。《玩具なし》は、2人～5人グループに分散していて、他の課題とかなりちがった傾向を示している。

2. グループの変動

グループ構成の動きを時間的経過からさぐってみる。個人の行動観察から、10分間に一番長い時間継続して遊んでいた状態を取りあげ、10組の平均継続時間（最長継続時間の平均）を算出すると、

《ボール》 《綱》 《床上積木》 《玩具なし》
平均時間 2分15秒 3分35秒 5分48秒 2分30秒
指 数 90 142 232 100

となる。下段の数字は、《玩具なし》の継続時間を100としての指数である。《ボール》が一番継続時間が短かく、つぎに《玩具なし》《綱》の順に時間が延び、《積木》がもっとも継続時間がながい。《ボール》や《玩具なし》に比較して《積木》は2倍以上である。この継続時間からグループの変動をみて、もっともグループに変動の少ないものが《積木》であり、《綱》も比較的変動が少ないといえる。《ボール》は変動が激しく《玩具なし》よりもグループ持続が短い。

3. グループの形成過程

1) 友だちへの働きかけ

子どもたちが集団を構成していく過程として、そのきっかけとなる相手への働きかけを検討する。個人の行動観察によって記録された友だちへの働きかけをみると第4表、第5表のようになる。第4表は、表の繁雑をさけるため、課題別を省略して、各課題の合計の働きかけを個人別にみたものである。第5表は、個々の子

被験児名	相手ひとり	2人以上	計
K. H.	28	18	46
K. I.	56	16	72
H. O.	28	16	44
T. N.	42	18	60
y. h.	6	2	8
k. i.	53	10	63
K. M.	41	6	47
H. O.	21	18	39
M. M.	33	12	45
k. i.	52	8	60
平 均	36.0	12.4	48.4

第5表 友だちへの働きかけ(課題別) カッコ内%

	《ボール》	《綱》	《積木》	《なし》
相手一人	85 (87.6)	82 (70.8)	92 (76.6)	101 (67.4)
二人以上	12 (12.4)	34 (29.2)	31 (23.3)	49 (32.6)
計	97 (100.0)	116 (100.0)	123 (100.0)	150 (100.0)

どもの働きかけを合計して、課題別に表わしたものである。

第4表でみるように、全課題のあそび中(10分×4)子どもたちは、平均48.4回、1分間1回以上友だちに働きかけをしている。そのうち、ひとりの子への働きかけが平均36.0回、2人以上の子への働きかけが平均12.4回である。個人への働きかけとグループへの働きかけは、3:1の割になる。個々の子どもについてみると、働きかけの回数には相当の開きがあり個人差が大きい。T. N. や k. i. は60回以上であるのに y. h. は8回の働きかけしかしていない。また、働きかけの相手がひとりか多ぜいかの割合もちがっている。H. O. (No. 8組)は、この割合がほぼ同じになっているが、K. M. や k. i. は、相手ひとりに働きかける方が7倍と飛躍的に多く、その開きをみせている。

第5表により、友だちへの働きかけを課題別にみると、もっとも多いのが、《玩具なし》150回、もっとも少ないのが《ボール》97回で、《ボール》は《玩具なし》の $\frac{2}{3}$ である。《積木》と《綱》はこの中間にあり、123回と116回になっている。また、グループの働きかけを拾ってみると、やはり《ボール》が一番少なく、《玩具なし》がもっとも多くなっている。

この結果とさきの遊びの形態およびグループ構成人数とは一致しない。《玩具なし》は、働きかけの回数多く、相手二人以上への働きかけも回数が多いが、おしゃべり他が多くグループ構成の形まで及んでいないといえる。《ボール》《積木》《綱》は、働きかけの回数とグループのまとまりがほぼ一致している。たとえば、《ボール》のばあい働きかけの回数が目立って少なく、あそびの協同形態やグループ構成人数がこれまた他の課題より一番低い点で一致がみられる。

2) 編成メンバーによる要素

10組の編成組別にあそびの形態をみたのが第6表である。No. 3、5、8、9の組はグループとしてまとまって遊んでいるが、6組、7組はふざけたり、おしゃべりなどが多く、グループとしてのまとまりが少ない。この

第6表 編成組別によるあそびの形態 (%)

	傍観	孤立	ふざけ他	平行	協同	計
1	12.5	14.0	19.5	19.5	34.5	100.0
2	6.8	1.5	36.1	19.5	36.1	100.0
3	4.5	13.5	10.0	10.0	62.0	100.0
4	3.5	4.5	25.0	18.0	49.0	100.0
5	6.0	11.3	8.0	19.3	55.4	100.0
6	3.3	8.7	53.3	13.3	21.4	100.0
7	5.0	8.0	42.5	15.5	29.0	100.0
8	3.0	12.0	4.0	23.5	57.5	100.0
9	6.0	5.5	6.0	29.0	53.5	100.0
10	16.5	11.5	21.5	16.5	34.0	100.0

編成組別の差は、各メンバーのちがいに由来するものである。そして、集団の形成に影響を及ぼすのは、メンバーひとりひとりのちがいよりも、メンバーの子どもたち5人の人間関係に拠るところが大きいことが、つぎの結果によって明らかである。10組のメンバー編成のうち、7組と9組は、男子5名であり、そのうち3名はどちらの組にも編入されていて、10組のうちでもっとも似たような二つの組である。したがって同じ傾向のグループ形成ができるかという点、No.7はグループ形成の悪い方の代表であり、一方、9組はのぞましいグループ形成の代表と、まったくちがった方向に発展している。残りのメンバー2人のちがいが、それぞれの組の人間関係を一変し、まったく性格のことなるグループ形成にしているのである。

3) グループ形成過程の質的分析

a ボール 10組のうち、《ボール》の課題場面で、グループ形成のもっともよい組と悪い組を比較してみるとつぎようになる。

編成組	傍観	孤立	ふざけ他	平行	協同
○ No.3	5	5	3	4	33
× No.2	7	0	31	12	0

No.2の組は、ボールを持った3人がそれぞれ抱えこんでおり、持っていない子に「カシテアゲヨウカ」とからかって相手の頭の上にのけたり、ぶつけたりしては逃げていく。ボールをもっているのは男の子3人、女の子2人はボールにさわることできない。ボールを持っている子もボールであそぶより持ち歩いている方が多い。女の子のひとりとは実験者をチラとみながら「ボールモウ1個アゲバイイナ」とつぶやくが、相手に直接借りようと積極的な働きかけはしていない。

No.3の組は、はじめボールのとりあいがあり、①の子が「ヒドリデヤンス、ズルイヨ」といってボールの

なげあいに発展している。二人づつ組になったり、平行的にまわりつきをしたり、またとりあったりしながら、8分目に、①の子が皆に「サッカーヤロウ」と働きかけ、3個のボールを、5人いり乱れて、蹴る、投げる、追う、ころがすと全員が3分間続けてあそんでいる。

b 綱 課題《綱》は、あそび形態からみて、No.6がもっともまとまり悪く、No.8がもっともよい。

編成組	傍観	孤立	ふざけ他	平行	協同
○ No.8	1	3	0	0	46
× No.6	3	2	28	12	5

No.8の組は、③の子がおもにリードをとり、全員ひっぱりっこにはじまって、②が「ヘビダー」と綱をふるとそれを他の子がとんであそんでいる。またひっぱりっこになり、そのうち他の子がひきづられて「先生、タスケテ」と叫んだりする。さらにひとりの子を綱でまきつけてしまう。「デッカイ魚」とひっぱりと「神サマ、逃ゲルヨウニシテ下サイ」などはじめは遊びらしいが、次第に乱れてまとまりがなくなってしまう。③が自分勝手にあそびをひきまわしている。No.8は、数では協同あそびは多いが、むしろNo.1やNo.3の方が、なわどびをしたり、2派に分かれてつなひきをしたり、部分的にはあるが組織的あそびがみられる。

No.6は、①が「電車ゴッコ」というと、②が「ソナノヤンナイ」と拒否する。③が「アビヤロウヨ、ヨコモッテ、ひろゆきダメヨ」。④が「掻へビ」と綱をゆする。④は「ムズカシイヨ」ととぼうとじてとべないで怒る。①綱をもったまま、でたらめにかけまわる。②「ひろゆきヤメロヨ」④「ヤメタ!」と怒る。①⑥かけまわる。④「チットモアソベナイヨ、先生ニイッテボウカラナ」。①と②はとっくみあい、④と⑥は口げんかになる。④がおこって「帰ッテヤウカラネ」というと、⑥が「時間クルマデ(実験がすむ時間)ダメダモン」と、あそびに発展していかない。①が綱をぐるぐるまわすと、②が「何ダイ、ソナナソビ、オトナダッテベナイヨ」とおこっている。ひとりの提案が相手に拒否され、それぞれ自己のあそびを主張して、けんかのまま10分終了。

c 積木 《積木》のばあいには、No.4とNo.7が、遊びのまとまりで最上と最下位である。

編成組	傍観	孤立	ふざけ他	平行	協同
○ No.4	0	0	0	0	50
× No.7	0	2	8	12	28

No.4は、①②③と④⑤の二組に分かれ、それぞれ協同して積木で積んでいく。だんだん①②③のつくったものが大きくなる。3分目に入るとお互いに積木をつかいはたしてしまう。①②③が走っていったのは④⑤のグループ

の積んである積木をとってくる。こんどは④がとりかえしにいく。③「ダメだよ」とおこる。④「ともチャン、遊ぼう、アゲルカラ(積木を)」②「アリガタイネ」ということで、4分目から5人全員が協力して積んでいく。①がリーダー格で「階段作ろう」「上=三角ノ積木オテ」など発言する。①「コレドウショウカ」⑤「オ庭ニスレバ」など相談しながら進められ、終了まで7分間に積木全部をつかって三階建の家ができあがる。

No.7 は、はじめ、5人がひとりひとり積木をはじめ。②と④は、②の積み方をまねしている。③が他の子の積木をこわして歩く。③が積木にのって「スキー」と足をすべらせて歩きまわる。皆積木のをやめてスキーのまねする。③と⑥プロレスをはじめ、①と④②は1:2でけんかになる。③がリーダー格で柔道になったり、プロレスになったり、つかみあいのけんかになったりする。積木の上をかまわず踏んで、がけまわっては、とっくみあいで終始する。

d 玩具なし 《玩具なし》のばあいには、集団の散逸するグループと、集団のまとまるグループにはっきり二分される。ここでは典型的なものとして、No.5 組とNo.1 組を比較してみる。

編成組 傍観 孤立 ふざけ他 平行 協同

○ No.5 1 5 4 0 40

× No.1 7 6 15 14 8

No.5 の組は、①と②がチャンバラごっこ、④⑥③人がおみこしごっこであそぶ。①と②そのうちけんかになる。5分目に入り、②が皆にはたらきかけて、全員で「小豆マンマ煮イタッ……」と集団の唄あそびをはじめる。つかまったものを鬼にして最後まであそびつづける。

No.1 の組では、②と④、①と⑥がそれぞれおしゃべりしている。何となく歩きまわっていたりするが、そのうち、四つんばいになって歩く。床の上をごろごろ寝ころんで移動する。①と⑥、ついで③と⑥、①と③のとっくみあいのけんかがあり、その後歩いたり、ふざけて走りまわったり、全員所在なさそうにバラバラのまま10分間を終っている。

以上でみると、玩具によって集団の形成がそれぞれ特性をもっていることがわかる。(これについては、あとの考察にゆずることにする)。一方、リーダーの役割りや妨害者の存在が集団形成を変えていくことも明らかである。つぎに、リーダーと妨害者について検討してみよう。

4. リーダーの役割

グループの形成がうまくいくには、リーダーの存在が大きい意味を持っている。そしてリーダーと他の子との

人間関係、リーダーの性格によって、その存在の意義もことになってくる。前項のグループの形成過程の分析を叙述したケースでみてもわかるように、グループ形成がうまく、もりあがっているのはリーダー的子どもの働きかけが中軸となっている。《積木》No.4 のリーダーのように相手の子どもたちに相談したりして、各員の役割を尊重しているばあい、もっともものぞましいグループ形態をつくっているといえる。《綱》No.8 のリーダーは、自分中心に強引にリードをとるので、何となくひきずられている子がいたり、集団からはみだしてしまう子がおり、グループも、あそびも、まとまりがみられない。また《綱》No.6 のリーダーは、はっきり定まらず、それぞれが自己主張して協力体制がくめないでいる。なお、《積木》No.4 のリーダーが、《積木》以外の課題ではリーダーの役割をとらず、《ボール》《綱》のばあいはまったく相手への働きかけがなく、他の子にリードされている。《玩具なし》の場面では、3回ほど他の子に働きかけをしているが相手が応じていない。リーダーは、人間関係だけでなく、玩具によっても規制されていくといえる。

5. けんか、妨害者

集団形成に否定的要因となっているのは、けんかと妨害者である。けんかを課題別、個人別に集計すると、第7表になる。全実験中、25人のうち半数以上の13人が何らかの形でけんかをじている。とくに4名の男の子は10回以上におよんでいる。課題別にみると、けんかの回数は、《玩具なし》が圧倒的に多く17回、つぎ《ボール》8回、《綱》6回、《積木》4回の順になっており

第7表 けんかの回数

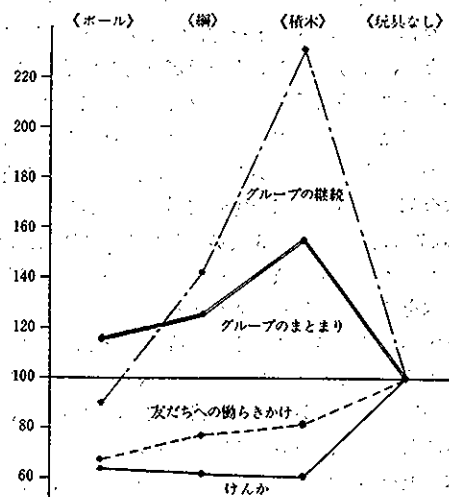
	ボール	綱	積木	玩具なし	計
K.M.	0	2	1	10	13
K.I.	1	3	0	8	12
T.K.	5	1	1	4	11
M.M.	2	2	1	5	10
K.M.	2	0	0	4	6
t.k.	4	0	1	0	5
k.i.	1	1	1	1	4
H.O.	0	1	1	1	3
K.H.	0	0	1	2	3
y.y.	2	1	0	0	3
N.T.	0	0	1	0	1
T.N.	0	1	0	0	1
t.s.	0	0	1	0	1
けんか回数	8	6	4	17	

《積木》は《玩具なし》の $\frac{1}{4}$ とけんかが少なくなっている。

集団を妨害するものをみると、けんかがとくに多い4名のものに、妨害的行動が多くみられる。つまり、集団妨害の行動は、相手メンバーが無視して応じない場合に、そのまま妨害的行動として残り、妨害を受けた相手が反撃に出れば「けんか」になっているといえる。

第2図は、グループ形成への玩具の規定性を明らかにするため、これまで、のべてきた結果の主なものを図示したものである。対照場面としてとりあげた《玩具なし》のばあいを基準として(100)、他の課題の場合を示した。グループのまとまりは、傍観とおじゃべりやふざけを除いたものをとりあげた。グループの継続は、形成されたグループの平均継続時間である。友だちへの働きかけは、個人観察に現われた友だちへの働きかけの各個人の平均頻数である。けんかは、実験中観察されたけんかの回数を示した。

第2図 グループ形成の玩具別の比較



察

材料の選択で触れた。5人に5個以上与えれば集団の発展は予測されないし、保育所や幼稚園で子どもひとりに1個づつボールを用意していない現状にもあわせて教をへらした。また5人グループにボール1個では、綱1本と似かよった条件になるので、これを避けて5人に3個の条件としたのである。

2) 《綱》は、4~5人の人数の多いグループ形成が他の課題に比べてもっとも多い。協同あそびも一番多くなっている。しかし《積木》と比較すると、グループの平均継続時間は、《積木》が5分48秒であるのに《綱》は3分35秒と、2分以上も短い。あそびのまとまりからみても、相手への働きかけからみても《積木》より劣っている。これは、《綱》が連鎖的に子どものグループをつくっていくが、集団の質は、たかめられていないことを明らかにしている。

3) 《床上積木》は、傍観やふざけなどの遊びに入らない子は少なく、グループの継続時間もながい。グループの構成人数は2人、3人が多く、互いに働きかけのある緊密なグループである。そして徐々に5人グループへと発展していくのが特徴的である。他の課題と比較して、《床上積木》は、もっともグループの質がたかく、グループ形成のもりあがりが見られた。

4) 《玩具なし》では、ふざけたり、おしゃべりしたりが多く、相手への働きかけは多いのに、グループ形成は

IV 考

以上の結果から、子どもの集団形成に玩具がどのような役割を果たしているかを考察する。

1) 《ボール》は、形成されたグループの継続時間が他の玩具や玩具のないときと比べてもっとも短い。つまり、玩具自体に動きのあるボールの特性によって、グループの変動がもっともはげしくなっているといえる。

また、平行あそびが多く、グループ構成メンバーが殆んど2人に限られていることも、他の玩具および玩具なしの場合と異なる特性といえる。子どもたちの働きかけも、もっとも少ない。けんかは、玩具のないばあいよりはずっと少ないが、他の綱や積木よりも多い。

3個のボールはまず、すばやく3人の子にとられてしまい、2人の子がとり残される。手放すと他の子にとられるので、並んでボールをついたり、天井にぶつかけたり平行あそびになる。子ども同志の力関係で、けんかが多くなるか、あきらめて傍観が多くなるかに分かれていくのは、うなずけることである。これらは、玩具の数の問題も含まれると思う。たとえば5人に対して1個であったら別のグループ形成ができるだろうし、5人に5個であれば、これまた異なった形となるだろう。

ボールを3個としたのは、つぎの理由にある。グループ形成への玩具の影響を配慮したことは、II方法②実験

もっとも少ない。グループの構成人数が散逸しているのも特徴的である。けんかが圧倒的に多く、グループにまとまりがみられない。しかし、創意あるリーダーがあるときは協同あそびに発展している。

5) リーダーの役割をとれる子がいると、グループ形成はうまくおこなわれる。リーダーは、編成メンバーがことなると当然ながら入れ替っている。しかし、同じ子が同じ編成メンバーでも、課題によってリーダーになったり、なれなかったりしている。課題によって得手、不得手があるからである。すなわち、玩具のちがいは、子どもの人間関係やリーダーをも変えていく。

2.

さて、保育のなかで子どもの友だち関係を発展させていくために、玩具をどのように活用していったらよいだろうか。本研究の結果からつぎのようなことがいえる。

1) 集団生活になじめない子、協同あそびが上手にできない年令の低い子どもたちには、連鎖的に子ども同志のつながりをさそい出す《網》のような玩具を利用できる。

2) 集団の質を高める——つまり、子どもたちが自分の役割を自覚して協力する集団へ導いていくのに《床上

積木》はよい玩具といえる。

3) 固定しがちな子どものなかま関係に、新しい集団づくりの刺激として、《ボール》のように、玩具自体に動きのあるものが有効的である。

4) 玩具の数が少ないときには、適当な指導をしないと一部の子が独占してしまう。5才児では、《ボール》などを自発的に3～4人で投げとりをすることができない。

5) 玩具のないばあいは、子どものなかにリードできるものがいなければ遊びは発展しない。保育者の指導が必要である。

6) 数多く玩具を用意すれば、当然のことながら集団に入れない子も、ひとりあそびはすることができる。《床上積木》のばあいは、他の玩具のとき傍観していた子もよく遊ぶことができた。

7) 子どものリーダーと追従者の関係を、玩具の種類を変えることによって、新しい関係に組み替えることができる。

以上、限られた玩具からではあるが、玩具のもつ特性が子どもの集団構成に影響を与えることが明らかとなった。子どもの集団生活をのばしていくために、玩具の選択に配慮し、積極的に活用することがのぞまれる。

The Role of the Toys that affect the Grouping of Children

Dept. 8 Michiko Hoshi
Reiko Yukawa

The purpose of this study is to investigate the role of the toys that affect the grouping of children as a study on nursery technique.

Experiment was made in one nursery room (30m²) during the period from April to September, 1968, using 25 children of 5 years old attending nursery school in Tokyo City. Three balls, a 5 meter vinyl rope, one set of building blocks were used for experimental materials.

Ten groups were indiscriminately composed of 5 children, and each group was experimented 4 times: «without any toys», «with balls», «with a rope», and «with blocks». A number plate ①~⑤ was attached on the shoulder of each subject right after he entered the experimental room. Waiting for some minutes while the subjects are minding the number plates (first time 5 minutes, from next time 3 minutes), the experimenter, taking out the toys, directs the children to play as they like. Ten minutes were spent for each experiment. Of 2 experimenters, one kept on observing one child, and the other recording at every 60 seconds the relations between the grouping and the toys, and each child's position as he moved about.

The results of these experiments were studied from the following 7 points of view: 1) playing form, 2) number of children joining the play, 3) duration of the grouping, 4) acting on the other children, 5) role of the leader in a group, 6) appearance of disturber, and 7) quarreling.

In the play «with balls», change of playmate is remarkable, and many remain by-standers. A group of 2 children predominates. In the play «with a rope», the most children play in concert, but duration is shorter than playing with blocks. In the play «with blocks», the least children remain by-standers and quarrel least, grouping develops and duration is the longest. In the play «without any toys», the most children act on others, disturb the group, quarrel and go on playing rambling. Only the group with a child assuming leadership can play in union.

We may conclude from these results: 1) for the children who can't easily join a group, a toy like «a rope» is available because it enables a child to join a group forming a connecting link between a group and a child, 2) «blocks» are suitable for developing the quality of a group as children can construct a large thing in concert, 3) to stimulate the children who tend to remain stationary into forming a new group, a toy like «a ball» is desirable as it itself is movable. When children play «without any toys» or with a few toys, some children tend to boss the group if a teacher doesn't help the group.

It has become clear by this study that grouping of children is largely affected by the special quality of a toy. For more effective children's group life, it is desirable to make the most use of the toys taking the special quality of each toy into consideration.